



Dr. 健康コラム

新型コロナの罹患後症状について（中編） ～罹患後症状へのアプローチ～

城里町国保七会診療所 上井 雅哉

令和6年12月現在、罹患後症状の原因、病気の本質が解明されておらず、標準的治療法も確立されていません。罹患された方々の就業、学業、余暇も含めた生活全般に影響するだけでなく、経済状況への影響や、精神的なサポートの欠如による社会からの孤立につながるリスクも懸念されます。したがって、罹患後症状を訴える患者さんを診療し寄り添うためには、単なる医学的管理や薬剤の処方だけでなく、患者さんの生活や社会的な側面も含めたアプローチが必要とされます。

○初診での医療面接

医療面接には一定の時間をかけて十分な情報が得られるようにするため、以下のようなポイントに注目して問診します。

1 急性期の病歴
発症の経過、重症度、治療内容
コロナワクチン接種歴

2 罹患後症状とその症状の程度
疲労感、倦怠感、呼吸困難感、咳
脱毛、集中力低下、睡眠障害

3 基礎疾患や生活歴
既往歴、生活歴、喫煙歴
ストレス など

4 生活・仕事への影響など
日常生活の様子、家族構成
業務内容、就業の頻度・時間

2. では複数の症状を訴えることが多いため、体系的に聴取します。
3. では基礎疾患や生活面などの患者背景を知ることが鍵となることもあります。
4. では症状の程度、日常生活への影響や仕事、学業への支障の程度を知ること大切です。

○検査内容

一般的には、全血球数（分画を含む白血球数、赤血球数、血小板数）、腎機能、肝機能、血糖検査、CRPなどの炎症マーカーを基本として、息切れのある場合は胸部単純X線検査、胸部単純CT検査、心エコー図を、動悸があれば安静時心電図、24時間心電図、心エコー図、甲状腺機能検査（TSH、FT4）、筋肉痛・関節痛では炎症マーカー（血沈、フェリチン）、CPK、自己免疫検査（リウマチ因子、抗核抗体など）が考慮されます。

血液検査は必須ではありませんが、疾患を鑑別する際に有用ことがあります。

めまいとふらつきを訴える患者さんでは「起立時の血圧と脈拍の変化」を。呼吸器症状や倦怠感を訴える患者さんでは、「労作時の呼吸回数やSpO2の変化」を観察します。

罹患後症状を訴える患者さんの中には、新型コロナとは直接関係のない疾患の患者さんが含まれている可能性があり、他の原因疾患を除外することが必要です。

かかりつけ医（またはプライマリ・ケア医）が身体診察や検査によって他疾患を考える場合（疾患の鑑別のため精査を必要とする場合や難治例も含む）は専門医等に紹介することも検討されます。

罹患後症状を呈する方は、症状がいつまで持続するのか、何をすれば改善するのか、等に不安を感じ感心が向けられていることと思われます。現時点でこれらに対する明確な答えは存在しませんが、その点を踏まえた上で目の前の患者さんを受け止め、どのようなケアを提供できるか十分検討すべきと考えます。薬物療法は対症療法中心となりますが、患者主体で行える非薬物療法も重要と考えられます（例えば呼吸困難感、持続する咳のあるとき、正しい姿勢による効率的な呼吸法の実践、リハビリテーションが有用の可能性あります）。罹患後症状の説明に加えて、現実的なゴールを患者さんと共有できるよう努め、さらに元の生活、社会復帰に向けても有用な情報提供と支援ができればと考えます。

参考文献：厚生労働省「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）診療の手引き 別冊 罹患後症状のマネジメント（第3.1版）」2025年2月26日（改訂版が公開されました）